資料

上總地方に於ける鎌倉街道の遺趾

―鎌倉時代交通史の一節として―

渡部英三郎

一

千葉縣君津郡波岡村大字上烏田の地内に

右　からすだ道

北　かまくら道

左　高くら道

の文字が辛じて讀み判じられる古い示道標が一基遺存する。上總地方に於ける鎌倉街道の調査はこの示道標を基幹として進められなければならない。

江戸末期時代の口碑や傳說が豐かに傳へられそして今も尙情調の町として都人の杖を曳く者が多い木更津町から周准の谷を三島村方面へ通ずる縣道を乘合自動車が通ふ。途中縣道千葉北條線波岡村下烏田地先で自動車をすて、東に向つて走る里道を六、七町行くと幾軒かの農家が道の傍や、

森の影などに點在して上烏田の小部落を形成してゐる。その邊から更に岐れて北に向ふ坂道を一町ほど登ると平坦な、松の木の多い丘が展開して波岡村と木更津町請西區（舊眞舟村）との堺を限り、示道標はその坂を登りつめて、丘の端れの芝草原に北に面して立つ。高さ三尺ばかり、幅一尺三、四寸程、前記三行の道を示指した文字の上に佛像の彫刻がある。他にも文字らしいものがあるが長い歳月の風雨に磨滅して、到底判讀し難い。村人達が道祖神とでも誤り考へてゐるのであらう。その傍には、屢々道祖神のほとりに見るやうに二、三本の樹が植えられ（或は自然に生長したものかも知れない）また常盤木の枝や草花などが墓石に手向けるやうな形に立てかけられたりしてあるのを見かける。

この古い石が鎌倉街道の示道標であることが一部の人々に知られたのはまだあまり久しい以前のことではない。嘗ては相當賑つたであらう。この街道筋の交通に關する傳說や物語も長い時代の推移變遷と共に、何時か自然に消滅して、示道標のみが、人家を離れたこの丘の上に忘れられたまゝに數百年の歳月を風雨に曝らされて來たのであらう。

明治の末年頃、鄉土史の研究に熱心な小熊吉藏氏（君津郡吉野村）が、君津郡誌編纂の資料を蒐集するために、東京帝國大學圖書館に行かれた際、大學所藏の記錄により偶然に其の存在を知る機會を得、その後數次の實地踏査をして調査を進められ、昭和八年三月千葉縣史蹟名勝天然記念物調査第十輯に、その調査研究の結果を發表されてからはじめて一部の人々の間に知られるに至つたものである。當時小熊氏は君津郡誌編纂委員の他の一人と共に東京帝國大學に坪井正五郎博士を訪ね、その厚意によつて、其頃大學圖書館に所藏の、元内務省地理局が、大日本地誌編纂の目的を以て蒐集した資料の原稿を借覽されたが其の中にこの示道標に關する簡單の記錄を見出されたといふ。

然し鄉土誌の研究に相當深い關心と興味を有つ地方の、これ等の人々までが誰一人知る者のなかつたこの示道標がそれ以前何人によつて調査せられ、大日本地誌編纂の資料

として提供せられたかについては未だに明かでないといふ。（內務省地理局の、大日本地誌編纂の企圖は如何なる事情に因るか遂に實現するに至らず、蒐集された資料は前記の如く帝國大學圖書館に於いて保管することゝなつたが、大正十二年の震火災の際燒失して了つた――小熊氏談）

二

この示道標は上總地方に於ける鎌倉街道の存在を立證す可き、最も確實な遺跡であることについては何人も異論はあるまいが、それが元內務省地理局蒐集の資料中に記載せる如く建久年間に設置せられたものであるか否か等の點に關しては種々異つた考へ方もあるであらう。それは後に述べるとして、兎も角斯樣な動かし難い確實な遺跡が遺されてゐるに拘らず、上總地方に於ける鎌倉街道に關する記錄は全く舊文獻の上にあらはれてゐない。少くとも筆者の狹い見聞の範圍ではそれを見出し得ない。

同じ關東地方でも隣縣、埼玉縣內等には、當時の覇府鎌倉から多摩の國府を經て、上野下野、または信濃越後の方面までも通じたらしい所謂、鎌倉街道に關する記錄の遺れる個所も尠くない。恐らくは下野國足利庄に足利氏、上野國新田庄に新田氏等、有力なる豪族が蟠居して、鎌倉幕府との政治的交渉等が、房總地方などよりも多かつたのみならず二氏が幕府の末期にそれが討伐の花形として軍勢を進めた等の關係もあり、現在の埼玉縣地方はその交通の要衝に方つてゐたことに因るであらうと思はれる。少し話が傍道へ外れるやうだが參考までに埼玉地方に於ける鎌倉街道に關係ある記錄の三、四を文獻から拔萃して見よう。

文明年間（一四八〇年前後）に書かれた廻國雜記は入間郡所澤町附近を通過してゐた古道につき

此所、今、江戸より秩父郡へ往還の馬次より、又古の鎌倉街道の名殘りなりといふ道なり、昔も宿驛などにや陸田多し

と記し、吉田博士の大日本地名辭典にも

所澤は古の鎌倉街道の古驛にして往時鎌倉より多摩の國

府を經、こゝを通過して兩毛地方へ赴く者此邊を通過せりといふ。その道が久米川、入間川を經由せることは古書に散見す

と述べてある。

それから西北に當る入間川町についても地名辭典は

此地も所澤より舊道通ず、即ち多摩の國府より上野國への古道にあたり、往時の兵馬馳驅にあたりては必爭の渡津なりき

と云つて、所澤を通過せる鎌倉舊道が延長してこの地を通過せることを示し、新記は左の如く記す。

古の鎌倉道の跡は小名中宿の裏に當りて子の神といふ所あり、こゝより入間川を渡りて高麗郡廣瀬（筆者註—現在の入間郡水富村……以下カツコの中は筆者の註）柏原（現在の同郡柏原村）の間に通じて女影村（現在の高萩村の内）に續けり。正慶年中、鎌倉攻めのとき、新田義貞が上州より打て出で此道にかかり、入間川に對陣し終に打勝て府中へかゝりて鎌倉に攻め入りしと

また口碑は傳ふ。

村内（現在の入間川町を指す）小名子神の背後を昔、八丁の渡と云ひ其川幅八丁あり、こゝを渡れば高麗郡廣瀬村より（現在の水富村内）これ古の鎌倉道にて……云々

また現在の入間郡吾妻村久米についても新記は記してゐる。

久米村の中に今も昔の鎌倉街道あり、道幅僅かに三、四尺、これ大平記が小手指原合戰の條に、將軍方十萬餘騎を五手に分ちて中道より寄せしといふ跡なるべし、久米川に一日逗留せしといふを以て察せらる。

同じ新記は更に柏原村に就いてもいふ。

柏原村、笠間村の間に信濃街道の名を唱へ、往古越後、信濃より鎌倉への往還にて此邊に霞關（入間郡霞ヶ關村）と稱する名所もあり、其南の小坂を信濃坂と唱ふ。

これによつて本街道は下野方面のみならず信濃越後の方面にも通ぜしことが推測せられるであらう。大日本地名辭典は現在の大里郡男衾村、用土村、本郷村針ヶ谷、榛澤村

沓掛、兒玉郡北泉村五十子、本庄町等を通じて群馬縣に走る古道に就いて左の如く記してゐる。

大里郡男衾より用土、針ケ谷を經て沓掛を通じ五十子、本庄に赴くを俗に鎌倉街道といふとぞ。

かくて古の鎌倉街道が、埼玉縣を貫通して、群馬縣に向つて走れることを推察せしめるに充分であらう。

三

然るに上總地方は謂はゞ一葦帶水、相模武藏に對し、地理的に鎌倉覇府と極めて密接な關係に立つに拘らず、幕府の治世を通じてあまり華々しい活動の舞臺に登場した者がなく、隨つて鎌倉時代の歴史または物語を語る者に深く印刻せられなかつたゝめか、鎌倉との交通關係を記錄せる文獻が、現在のところ全く見出されない。それ故に現在では上總地方に於ける舊鎌倉街道の存在を文獻に依つて立證することは寧ろ不可能のことに屬し、本稿はたゞ前記の鎌倉街道示道標、その示道標が指し示してゐる古道の跡、沿道に點在せる、鎌倉または源氏に因める地名、古道の沿道に傳はる口碑傳說等を檢討し、更にそれを對岸武藏國六浦莊金澤（現在の神奈川縣久良岐郡金澤町。鎌倉時代の港津）及び其附近に關する當時の記錄等との聯關に於いて考察を下し、鎌倉街道の嘗て上總地方に存在せることを肯定する等の範圍を出ずるを得ない。

まず、示道標が指示するところに從つて古道の跡を尋ねる。示道標が「地かまくら道」として示す古道はそれより稍西に傾きつゝ丘の嶺線を直通して、約十數町若しくは二十町足らずにして丘陵の端に達し、それから木更津町櫻井區に下り、そこで形跡を失ふ。其邊一面田圃であつて、古道の跡は既に耕し盡されたものと思はれる。道幅二、三間から三、四間位、往時はそれよりも廣かつたらしい地形が窺はれ、丘の最高點を貫いて走つてゐる。樹間より遠く木更津平野の展開せるが眺められ丘の中腹の平地や、小さな谷間の盆地などに一軒二軒の農家があつて鷄の聲を長閑に聞く。道の兩側には高土手を築いたらしい跡なども見受けられるが、果して當時の工作に成れるものであるかどうか

は判らない。今でも波岡村地方から木更津町に出でる近道であつて里人の通行するものが尠くなく、路面等も、示道標が示す「高くら道」などと比較して荒廢が少い。示道標から左に走る高くら街道は現在の君波郡鎌倉村大字矢那高倉に通ずるものであるが、これも其の方向に向つて續く平坦な丘の上を通り道幅も少くとも三、四間はあり、兩側に確かに築堤の跡と思はれる場所などもあり、往時重要な道路であつたことを思はせるに充分であるが、今は荒廢するがまゝに委せるものと見え、路面は殆ど雜草に蔽はれ、僅かに人、馬のみが通ふ細通が舊路面の一部に踏み固められてあるに過ぎない。里人等が山林に所要の際通行するのみであるといふ。現在、山間の一僻村に過ぎない鎌足村高倉に向つて當時斯樣な大道路が通じてゐたことについては種々臆說が行はれ、或は郡司の所在地であつたと云ひ或は有力なる豪族の根據地であつたとも想像されるが徵す可き文獻が見當らない。然し何れにしても鎌足村の高倉が中古まで相當重要な、若しくは有名な場所であつたことは、同地の所謂高倉觀音堂が坂東三十三番中第三十番の札所であり、大化二年丙午の草創と傳へられるのみならず、近隣の古道の分岐點等に立つ古い他の示道標にも高倉を示す文字の多いのを見ても肯かれる。宗教的にか、政治的にか、または其の兩方の意味に於いてか判らないが、何等かの意味に於いて、地方文化の一中心を成してゐたものであらう。それでなければ相當工作を加へられたであらう。斯樣な大道路が山深い高倉に向つて開通せられる譯がないからである。

鎌倉方面から海を渡つて來た者（これについては後に述べる）は、木更津附近の海邊から通じたであらう。前記の鎌倉街道を通つて示道標の地點まで來て、主として何れの方向に向つたであらうか。言葉を換へて言ふならば、この鎌倉街道が開設された目的は何んであつたかといふ問題に逢着しなければならないことになる。示道標から右へ通ずる「からす田道」は恐らくは、現在の波岡村々道でそれより、一は海岸に近く南へ下り、他は八重原中、小糸秋元等の諸村を貫く縣道に出で、周准の谷へ通じたものと思はれ

るが、その邊は單なる小豪族の割據せる以外に、重要な政治的、または文化的意味を有つ地方であつたと考ふべき理由がないのを見れば、この鎌倉街道の主要なる目的は高倉方面へ交通するに在つたのではあるまい。前記の「高くら道」が、鎌倉街道の名稱によつて稱はれた道路に較べても劣らぬ大道路であつたらしい形跡からもこの推論は成立つものと考へられるが尙大方の示敎を待つに切なるものがある。

四、

鎌倉地方から東京灣を横切つて渡航して來た船は何處へ着けられたであらうか。

木更津町大字貝淵の海岸に渡海面と稱する小字がある。小熊氏は地理的關係から見るも、この地が、鎌倉航行の船着場であつたに相違ないと斷ぜられてゐるが、後にも述べるやうに、對岸六浦莊の海灣が鎌倉時代に於ける可なり有名な港であり、上總地方との交通があつた事實が明かである點や六浦の海岸とこの地方の地理的關係や、渡海面といふ地名が航海にゆかりのあるらしき點等から考へて反證のない限り、それは異論なく肯定せらるべきであらう。鎌倉幕府の命令を傳達すべき使節や、信仰厚き善男善女等などは六浦の海港から船に乘り上總の地に上陸して、各々その目的地に向つたことであらう。

前記の示道標を中心とする鎌倉道の外に、木更津町渡海面から東北へ數里隔てゝ、君津郡根形村から同郡平岡村、市原郡姉崎町を經て、同郡戸田村中高根區に亘る平坦な大高臺の上を約三里の間、沿道の人々が鎌倉街道の名稱を以て稱ふ古道が、殆ど直線を成して通つてゐる。筆者は、小熊氏の調査の結果に敎へられつゝ一日、土地の古老に案内されて沿道を仔細に踏査する機會を得た。示道標などの如く確實な資料を見出すことは出來なかつたが、沿道隨所に鎌倉及賴朝に關する傳說口碑の豐かに傳はれるを知り得た。土地の人々は女や子供までその古道を鎌倉街道の名で稱び、石橋山の戰に敗れて房州へ逃れて來た賴朝が再擧のた

めこゝを通つて下總方面へ進んだ道路であるなどゝ語り傳へてゐる。

根形の平野から同村大字下新田の坂を上ると市原郡方面まで連亘する大高臺が廣々と展開して豐饒な畑が黑々と見渡される。所謂鎌倉街道は其高臺を多小地に傾きつゝ東に向つて一直線に走つてゐる。下新田の坂から根形小學校の校庭を過ぎる迄の間は新道の開設や校舍の建築等のため、今は全く廢道となつて、人の通らぬ古道の面影を雜木の茂つた疎林の間に遺すに過ぎないが、數十年前までは一般の交通に供せられてゐたことが、古老の記憶に殘つてゐる。その邊の土手際などに、小さな道祖神などが、全く忘れ去られたやうに、建てられてあるのも見受けられる。現在の小學校々庭を古道が通つてゐたこともまだ村の老翁達の記憶に在つて、現在校庭の中頃に殆ど直線を成して並び繁つてゐる松樹の數本は古道の道側にあつたものがその昔し殘されたものであるといふ。

下新田の坂から根形小學校の校庭を過ぎるまで二、三町。それを過ぎると舊道は何物にも遮られることなく坦々たる畑や、若い松樹の林の間などを貫いて東へ東へと走る。道幅二間位から場所によると四、五間位、案内してくれた古老の話によれば數十年前までは道幅が現在よりも遙かに廣かつたが、兩方から畑が擴げられたり、松林が路面に當るところまで突き出して來たりして、こんなに狹くなつて了つたといふことである。前にも言つたやうに、この古道跡は、根形村より平岡村、姉ヶ崎町を過ぎ、戸田村大字中高根まで續くが、中高根の耕地まで來てその形跡は失はれる、これも道の跡が耕されてしまつたがためであることはいふまでもあるまい。途中、姉ヶ崎町と平岡村の村界で、現在の縣道千葉久留里線と開通するために開鑿された大きな切通によつて斷絶せられる。古道は切道の最高地點を通つてゐたものである切道で一度縣道に下り、再び向ひ側の丘に上れば鎌倉街道は松林の多い平坦な廣臺を通つて前記の戸田村中高根に達するのである。

この舊道筋に沿ふ部落は南側に下新田、三ツ作、大曾根、

岩井（以上根形村）下泉、上泉、川井原（以上平岡村）等があり、北側に野田（根形村）藏渡（長浦村）天羽田、深成、豐成、立野新田（以上姉崎町）中高根（戸田村）等があり、それ等の部落に鎌倉または源氏に因める地名やそれに關する傳說が多いのである。例へば長浦村大字藏波には「鎌倉街道」と稱する小字があり、根形村大字野田にも同じ地名の小字が現存する。野田區字鎌倉街道は、古道に沿ふ平坦な小松原で十年程以前までは草野であつたといふ。その邊に人家が在つた所であるかどうかは未だ明かでない。平岡村大字川井原區には「鎌倉通り」の地名が現存する。根形小學校の近く（三ツ作地內）に白旗森といふ地名があり、頼朝を祀れる所と傳へられるが今は開墾されて、麥畑となつてゐる。畑を耕してゐた老農婦も案內してくれた古老も共に、二十數年前まではそこに椎の老木などが鬱然として繁り、その中に小祠が祀られてゐたが、開墾と同時に附近の八幡神社に移し祀られたといふ過去の日を語つてゐた。姉崎町地內道傍の畑の眞中に數尺積上げた古い塚やうのものがある。これを取り除けば可なりの耕地が出來るに拘らず、鎌倉公通過の砌この上に憩はせられた箇所と傳へ、耕さずに殘されてあり、また頼朝が晝食したといふ赤松の生えた塚などもそのまゝ殘されてある。そうした傳說口碑を拾ひ集めて見ることも興味深いが他日に讓つて話を進めてゆかなければならない。

五

傳說は兎も角として、この地方に鎌倉に因める地名が多く散在し、且つ確かに古道の幹線と認められる道路の現存する事實を、鎌倉幕府と上總地方との交通關係と無關聯に考へることは不可能であらう。

然らば、鎌倉との海路交通の船着場として想定される前記の渡海面（現在の木更津町貝塚）から、この古道跡の殘る根形の高臺まで達する數里の行路は何處であつたか。木更津からこゝに至る間は何れも平地であつて、田畑と化し全く舊路線の遺跡を認め難いが、渡海面に上陸すると一筋

の道路は前に述べたやうに東南して木更津町櫻井區を經て示道標のある方向に走り、他の一筋の道路はそれと反對に東北に向つて清川村、中郷村の平地を過ぎ前記の根形村下新田の坂を上つて廣大な高臺を東へ貫通したものと推測すべきであらう。小熊氏は渡海面から根形の高臺に達するまでの經路を、木更津町大田山の西麓を通り清川村、長須賀區、永井作區を通り、小櫃川を横ぎり、中郷村十日市場、井尻、更に根形村飯富新田の内字市場の邊を經て、高臺に通ぜしものと推測されてゐるが、地形の上から肯定すべきであらう。殊に飯富新田にも、源氏に因める白旗森の地名が（十數年前までは鬱蒼たる森があり、狐狸の棲むところとして村の婦女子達に恐れられてゐた場所であつたといふが、現在では開墾されて地名のみが遺つてゐる）あり、且つ古老の實話によれば其附近は一面泥土深き水田であるに拘らず、小田一枚程宛の幅に亘り、可なり長い間、田の底が固く、際立つて淺い地帶が其方面に向つて連續してゐて往古から、頼朝公が房州より軍馬を率ひて通過された道跡と傳へられてゐるといふから古道の跡とも推測せられることなどから考へ、小熊氏の推測は反證のあがらない限り肯かるべきであらう。

この方面の古道の形跡は屢々言つたやうに、市原郡戸田村中高根に至つて消失するが、然らばそれから何れの方向に向つて走つてゐたであらうか。ここでも當然同じ此問題に突き當らなければならないことになる。

戸田村から海上村、市西村を隔て北に市原郡市原村がある。同村總社附近に上總國府趾があるといふことは既に定説に近いが未だ歴史的事實として確認すべき史的資料に乏しい。それに關し和名抄などにはたゞ

上總國府　在市原郡　行程上三十日、下十五日

とあるのみである。然し一般に行はれてゐるこの説が謬りでないとすれば延喜式に

上總國、大、遠國、管十一郡

とあるなどに徴し、上總は大國の一であり、隨つて其國府は王朝時代から相當重要な政治的中心の一つであつたこと

が推測せられるから、市原村總社は當時地方の文化、政治の有力な中心地であつたものと考へられる。鎌倉幕府の成立以後も國司は幕府の地方官たる守護地頭と並び複雜な關係の裡に、尙朝廷を代表して地方行政に携つてゐたのであるから、國府の所在地が交通網の上から除外されようとは考へられない。隨つてこの古道も戸田村から現在の市原村方向に向つて通じたものと推測するは決して無理ではあるまい。鎌倉幕府以前、既に國府の所在地が地方交通の中心であつたことは明かであるから市原村から其管轄下に在る郡家（例へば君津郡中郷村望陀は望陀郡司の市原郡海上村は海上郡家の所在地であつたといふ）等へ通ぜし道路が、鎌倉時代になつても、そのまゝに、または、一部道筋等を變更して交通せられたのがこの古道であり、そして鎌倉覇府が完全に政治の實權を掌握し、この地方と鎌倉との交通が盛んになるに從つて何時か、それが鎌倉街道と稱びなされるに至つたものではあるまいか。

池本泰兒氏著「日本道路史」によれば平安朝時代に於ける東海道幹線は勢多を首驛として近江の西南を走り、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆　相模、武藏、下總等の國府（下總國府は現在の東葛飾郡市川町國府臺）を經て常陸の國府に達する道路であり、その支路として下總國府より海岸傳へに上總國府に至り、更に安房國府に達する道路があつたといふが、その下總國府より上總國府を連ね、安房國府に至る道路と今こゝに問題としてゐる古道との間に何んの關聯もなかつたであらうか？それ等の點については他日の調査を俟たなければならない。

六

以上述べて來た所謂鎌倉街道が、實際鎌倉との交通道路であつたことを認めるには、この兩對岸地方の間に海上交通のあつたことを明かにするのでなければ充分でないが、上總の斯邊の港津から、對岸へ交通のあつた記錄は見當らないから、對岸に在る海灣に關する當時の記錄に眼を轉ずることが必要となる。

鎌倉から上總へ渡るには陸路に上り三浦半島を横切り半島の東海岸にある現在の金澤町に當る金澤、榎戸（現在の三浦郡長浦）あたりから船に乘らなければならない。鎌倉時代に於いて金澤や榎戸が浦河（現在の浦賀町）など丶共に港であつたことは廻國雜記に

浦河の湊といへる處に至り、此は昔頼朝公の鎌倉に住ませ給ふとき、金澤、榎戸、浦河とて三つの湊なりけるとかや、元の木戸はさしはりて見ず、浦河に門を並べて見ゆる家々

など丶あるに徵しても明かである。その中、浦河は寧ろ安房、若しくは上總南部の富津邊との交通地點であり、渡海面方面との舟航に適せざるは地理的にも明かであるし、文獻の上にも

上古相模より上總に來るもの、航路走水より周准に至る、即ち此津なり（註、此津といふは富津である）

と見えるから、相模より上總渡海面への渡航は榎戸か金澤から出帆せられたものと思はれる。然し榎戸も鎌倉渡海面間の航船の發着場としては地理的に不自然であるばかりでなく文獻の上にも、そうした形跡が見られないが、金澤港は當時鎌倉から新道が開設せられ其間の往還が盛んであつたばかりでなく、それより上總地方へ航行された形跡も文獻の上に現はれて見えるから、鎌倉、渡海面間の船着場は金澤附近の港灣であつたものと推定すべきであらう。

現在の久良岐郡金澤町に屬する諸部落から同郡六浦莊村釜利谷邊に至る間の地域を往古六浦莊と稱し、景勝の地で將軍が鎌倉から遊覽し海上に船を浮べて歡樂せることなども古文に見える。

寛喜二年三月、將軍家爲御遊覽

出御于三崎磯山、櫻花最盛也（中略）

自六浦津自召御船、海上有管絃、有連歌（下略）

六浦津といふは現在の金澤町洲崎附近の海岸らしく其南端に當れる邊を三艘泊と稱したがそれについて新篇風土記は次の如く記してゐる。

三艘泊りは六浦の南の方なり。往古唐船三艘來り泊れる

により三艘泊と名附けたり。その時載せて到れるといふものに一切經、青磁の茶瓶、香爐等あり、今同地稱名寺に傳はれりといふ。

そしてその三艘泊こそ上總地方への交通の港であつたことは沙石集の左の記載によつても明かに知り得られるであらう。

鎌倉過ぎて六浦と云所にて、便船を待て上總へ越さんとて濱にうちなしてやすみける程云々。

鎌倉より陸路六浦の津に至り上總行きの便船を待てる旅人の手記であらう。渡海面への航行といふことは明かに文字の上には現はれてゐないが、地理的位置から考へ、上總の着船場が渡海面または其附近であつたことが察せられる。

交通が如何なる程度に行はれたかについては徵す可き文献を有たないが、沙石集の記事が六浦の濱で上總行きの便船を待つたといふ物語を載せてある點から考へても、定期といふほどのものではなくとも相當瀕繁に船が通つたのではあるまいか。何か必要があつて幕府の命令を上總地方の守護地頭に傳達したり、または直接地方の豪族共に命令を齎らしたりする幕府の使臣なども相當繁くこの航路を往還しなければならなかつたであらうし、また幕府に奉伺したり、政治的用件等で上總地方の豪族などがこゝを渡つて鎌倉に來往したものも多かつたであらう。幕府の召集に應じ軍兵を率へて鎌倉に走せ參ずる上總の豪族等も、陸路上總より武藏を廻り鎌倉へ到達したものとは考へられない。恐らくは數艘若しくは數十艘の船に、武裝嚴しめき一族郎黨を乘せて、渡海面より六浦の津へ渡つたことであらう。兩對岸地方の商取引等の關係については、現在の筆者は全く知識の有ち合せがないが、上總地方より當時の首都、鎌倉に乘り込む旅人等なども尠くなかつたらうし、また相模方面から上總方面へ渡る宗教的意味を有つ旅行者なども、今日我々が漠然と考へるよりは多かつたとも考へられる點もあるから、この間の交通は相當殷賑を極めて居たかも知れない。

言を俟たない。

前にも言つたやうに元内務地理局が蒐集せる大日本地誌編纂資料は前記君津郡波岡村中烏田の鎌倉街道示道標を建久年間の設立として記してゐるといふがその根據については未だに聞き知る機會を得ない。若し示道標が建久年間の設置とすれば、鎌倉街道の開設も同じ建久年間に推定すべきが至當であるが、動かし難き確證があれば格別、然らざる限り、單に頼朝が、鎌倉幕府の創始者であり、はじめて天下に號令せる第一代の將軍であるといふやうなことから道路開設等の事業迄、悉く頼朝に結び付けることは寧ろ危險であらう。

左に掲げる鎌倉から六浦莊まで約二里に亘る新道開設の記錄は、鎌倉街道（上總に於ける）新設の時期を考ふる上に多少の參考となるであらう。

（東鑑）

始めて此道を開かれしは仁治元年十一月晦日（一、二四〇年、北條泰時執權の時）始めて當道とせらるべき由評

七

六浦津、渡海面間の交通が何時の頃から開始されたかは詳かでない。想象を頌にすることが許されるならば東京灣は太古未開の當時、既に原始人的な小舟によつてさへ、渡海が可能であつたであらう。日本武尊の物語りなどは、既に上古の時代から相模上總間に海上交通が行はれてゐた事實の反映とも見られよう。

源氏が覇府を鎌倉に開く以前より、恐らくは六浦、渡海面地方兩海岸住民の間にも交通が行はれてゐたことであらう。物資の交換も決して絶無ではなかつたらうし、宗教的意味の旅人なども往還したであらう。けれ共そうした稀な、そして不規則な交通のみによつて對岸に在る地名を冠せる路線名の道路が上總地方に開設せられる譯がない。從つて上總地方に於ける鎌倉街道の開設は鎌倉が政治の中心となり、覇府と地方豪族との政治的關係が緊密になり、兩地方の間に交通が盛んになつてからのことに屬することは

定有て今日繩を曳、丈尺を打て御家人等に裂渡し明春三月より造らるべき由仰付けらる。

同二年四月五日、六浦の道を造始めらる。前武州（泰時）其所に監臨し給ふ間諸人群衆し各土石を運ぶ。

即ち仁治元年十一月晦日に幕府がこの道路の開設を評議決定して直ちに測量して工事區域を分割し工事の執行を家來に分擔させることゝし次の年の三月から起工することゝなつたが、一月餘り遲延して四月五日に起工、工事の現場へ執權北條泰時自ら出場して工事監督に當り、出來上つた道路であるといふが、優れた民政家であつた泰時あたりのやりそうなことである。

從來、鎌倉の市街から、六浦莊へ出るには嶮はしい山路を超えなければならなかつたが、その峠を開鑿して切通して出來た切通が朝夷奈の切通である。その道路の開設が古いものでないことについて、鎌倉志も左の如くに記してゐる。

此道を踰ゆれば六浦に至る往來也、嶮隘の路にて爰より若干ゆけば武藏、相模の界なる鼻缺地藏といふを國境とす。鶴ケ岡より一里ばかり又地藏より六浦莊金澤まで一里といふ。

此往來は上世よりの路にあらず。

兎に角、優れたる民政家の素質を有つた泰時が東方の海岸である六浦莊金澤へ交通の便を開くため可なり大袈裟な道路工事を起工したことはそれ等の記錄によつて明かに知ることが出來るが、其目的が鎌倉から上總方面への交通を便利にすることに在つたかどうかは詳かにするを得ない。若しその道路（鎌倉から六浦莊方面へ通ずる道路）開設の目的が、やがて上總方面との交通の便利を圖るに在つたとすれば、鎌倉街道は少くも、鎌倉六浦莊間の道路が先づ開通され、六浦津と渡海面間の交通が盛んになつた後に、上總地方の豪族等にでも命じて上總に於ける鎌倉街道を新設せしめたものではあるまいかとも考へられる。それは單なる憶測に過ぎないが上總地方鎌倉街道の新設の時期を考へる上の一參考とはなるであらう。

八

鎌倉、渡海面間の海上交通が何時まで續き何時の頃から廢止されたかについても詳かにすべき史料がない。然し鎌倉幕府が崩壞して、政治の中心が室町に移つてから後遠からず、金澤港が廢港になつたことは新記や廻國雜記の記する所からほゞ推察し得られる。

（新記）

金澤港と云へるは今遺跡なしと雖も洲崎村の邊を指せるなるべし（註―洲崎は現在の金澤町の海岸寄りの一部落）

（廻國雜記）

洲崎の湊と云へる所に至る、これは昔頼朝卿の鎌倉に住ませ玉ふ時、金澤榎戸浦邊とて三つの港なりけるとかや、

即ち廻國雜記の書かれたのは文明年間といふから鎌倉幕府の滅亡後、百四五十年の頃に當るが其の頃既に、金澤港の存在を過去の事實として記してゐるところを見ると、金澤港は廢港になつてゐたものと考へられる。

鎌倉幕府が倒壞してから後も、民衆の交通が直に杜絶して了つたものでは勿論あるまいが、この交通路の政治的意義は消失してしまはなければならない。文化の程度が低く、他國との經濟的關係が薄かつた時代に於いて、ある道路や海路がその政治的使命を失ふとき、その交通路は殆ど存在の意義を失ふであらう。

上總に於ける鎌倉街道もかくて次第に、交通上の重要性を失ひ、さびれ、荒廢し、やがてそれが鎌倉時代の街道であつたことまでも忘れ去られて了つたのであらう。

若し最初に掲げた示道標が見出される機會がなかつたなら、それが鎌倉街道であつたことは永久に知られなかつたかも知れない。

橋長〳〵　巴藤

三川の蘆に

風かほる